

懐風館高校 令和4年度第1回学校運営協議会 議事録

- 1 日 時 令和4年6月24日(金) 14:00～16:00
- 2 出席委員 5名
大関会長 森井委員 松村委員 阪本委員 棚瀬委員
- 3 内 容 (1) 14:00～14:40 授業及び校内施設見学
①「地理A」 (3年生)
②「現代文」 (2年生)
③「歴史総合」 (1年生)

(2) 14:50～16:00 報告及び協議 (会議室)

4 協議事項

第1号議案 会長(議長)の選出と職務代理の指名

会 長:大関 雅弘 氏

職務代理:森井 克則 氏 とする。(案)

⇒賛成5・反対0により、議決。

第2号議案 令和3年度「学校経営計画・評価」について(報告)

⇒賛成5・反対0により、議決。

第3号議案 令和4年度「学校経営計画」(案)について

⇒賛成5・反対0により、議決。

4 報告及び協議記録

<事務局より報告>

▲令和4年度学校経営計画の進捗状況について(校長より)

- ・生徒の学びをしっかりと保障するための授業力の向上について、各教科の研究授業や経験の少ない教員の外部研修の積極的な参加等の取り組みを進めている。また、羽曳野市内の中学校に公開授業の案内を送付し、授業見学に来ていただき中高の連携を図っている。
- ・これまで新型コロナウイルスの影響で中断していた「朝学」を2学期から再開し、クロームブックを活用した学びを実施する予定。
- ・地域との連携・交流を可能な範囲で再開し、福祉施設や保育園との交流を実施している。

▲今年度の学校の状況について（担当者）

＜教務部＞

- ・「朝学」ではグーグルフォームを活用し、基礎学力の向上を中心とした生徒の学びを支援する予定。

＜進路指導部＞

- ・今年度の3年生の進路希望先の割合は、四年制大学 30%、短大及び専門学校 50%、就職（公務員含む）20%とほぼ例年と同じ状況。

＜生徒指導部＞

- ・遅刻者数は昨年度より増加傾向にあり、各学年の指導の強化が必要。

＜保健部＞

- ・SCの生徒及び保護者の相談件数は昨年度よりやや減少している。2年生の相談が多い。担任、学年、教育相談委員会の連携を密にした生徒対応を心がけている。
- ・地域連携の取り組みの1つの地域清掃を5月と6月に実施。年間5回実施する予定。
- ・6月に1年生を対象にした薬物乱用防止講習会を開催。大阪税関局の職員を講師に招き、麻薬探知犬の実演などがあり生徒は興味深く聴いていた。

＜報告への質問・意見及び協議＞ □・・・学校運営協議会委員 ▲・・・事務局

□長く続いているコロナ禍の中で、中高生は部活動が全力で取り組めず参加率も下がっているのは憂えるべき状況。何かに一生懸命に取り組む経験は大切であり、何らかの対策が必要。

□懐風館の前身の羽曳野高校は部活動が盛んな学校として広く市民にも知られていた。今でも地域の方々は懐風館に対して同じようなイメージを持っておられると思うので、部活動や行事が盛んで活力ある学校であってほしい。

□色々な取り組みを進めているが、志願者が増えない原因はどこにあるのか。

▲南河内全体の中学校卒業生数が減っている中で、私学の専願率が上がっている。私学の授業料の無償化や奨学金制度による影響が大きいですが、広報においても府立高校は後れをとっている現状がある。公私切磋琢磨の中、懐風館高校も学校の魅力を高めるとともに広報をさらに強化しなければならないと考えている。

▲今年度スクールミッションの策定にあたり、学校運営協議会委員の意見を聞かせていただきたい。

□これまで示された学校経営計画が柱になると思うが、どのような内容をイメージしているのか。

▲本校は羽曳野市にある唯一の高校であり、南河内という地域に根ざし、地域から愛される学校であるべき。本校の母体校である羽曳野高校、西浦高校の時代から卒業生の多くは徐元に戻り、企業や行政機関のリーダーとして活躍している。今後も地域に貢献し、リーダーとなれる人材を育てるとともに、支援の充実した面倒見のいい学校でありたいと考え

ている。

- これまでの懐風館の実績を踏まえた内容で、わかりやすい言葉で表現するのがよいのでは。
- 教員も生徒も大きな視野に立った思考を行うために、外部との交流はこれからも大切にしてもらいたい。地域に貢献するためには地域以外との幅広い交流も必要。
- 懐風館は素直で純朴な生徒が多く、交流先も受け入れやすいと思う。そのような生徒が育っている懐風館のよさを外部に知ってもらえればと思う。
- 中学校においても支援が必要な生徒が増えており、生徒も保護者も進路先には安全で安心な学校を望んでいる。駅から歩いて通えることができ、雑音の少ない自然環境に恵まれた懐風館高校はそのようなニーズに応えられる高校ではないか。支援が必要な生徒も安心して学べる「ともに学びともに育つ」教育を実践する学校であることを望む。